

## 「唐人お吉」と東府や

お吉は本名を斎藤さちちといい、天保十二年（一八四一年）下田の船大工の娘として生まれました。

七歳の時、伊豆河津城主の愛妾、村山せんの養女となり、学問、遊芸を学び十四歳で芸妓となりました。芸妓となったお吉は、端麗な容姿と美声が評判だったといわれています。

当時、下田ではペリー来航、下田開港と大きな出来事が次々と起きていました。下田の玉泉寺に領事館を構えていた駐日アメリカ合衆国弁理公使ハリスが体調を崩していたため、身の回りの世話をする女性を探していた幕府は容姿端麗で評判の芸妓お吉に白羽の矢をたてました。もともとアメリカ側は看護婦に近い役目をする女性を探していたようですが、日本にはまだその概念もない上、外国人に奉公に出る一般の女性を探すのが難しかったともいわれています。

お吉がハリスに侍女として任えた一年余りの間には、条約締結のために上京するハリス一行にも同行しました。ハリスは將軍に謁見を果たし、見事に日米修好通商条約を締結して初代駐日公使となり、下田の領事館を開鎖して江戸の元麻布善福寺に公使館を置きました。

役目を終えた後のお吉は単身、京都祇園、静岡県三島「金本樓」の芸妓として渡り歩き、明治十一年（一八七九年）、望郷の念と共に下田へ戻ります。



下田では髪結いをしたり、「安直樓」という料亭をはじめたりしますがどれも長くは続かず、昔のことを知る人々に「唐人」と罵声を浴びせられることもあり、酒におぼれ身を持ち崩していききました。下田において迫害が続く中、お吉は約二年にもわたり当館で湯治をして、疲れ果てた心と体を癒しました。当館ではお吉を手厚く迎え、再び下田に帰るまで物心両面から支えました。お吉を下田に送る際、天城越えに使用したお駕籠は現在、当館の「東府や資料館」に展示されています。

ある時、豪雨で水量が増した下田川、門栗ヶ淵の上流で浮浪者とともにお吉の遺体が発見されます。明治二十四年（一八九一年）、お吉五十一歳のことでした。春には桜が綺麗なその場所は、現在では「お吉が淵」と呼ばれています。

お吉の生涯は幕末の開国に伴う悲劇として、たびたび小説や舞台にもなっています。悲劇的な最期を遂げることとなったお吉でしたが、当館での約二年の湯治の間は心安らかな日々を過ごしていたのでしょうか。

百数十年前、波乱に満ちた人生を送ったひとりの女性が縁あって当館に逗留して、今と変わらぬ景色を眺め、同じ川音を聞きながら心身を癒した日々、想いを馳せてみてはいかがでしょうか。

\*波乱万丈の生涯であったものの、庶民に変わりなかったお吉についての資料は少なく、また正当に検証されてもいません。残念ながら今となっては、お吉の軌跡を正しくたどることは困難です。上述の文章は、お吉の生涯について諸説あるうちの一つであることをご了承ください。